

甲骨文字談義(3)

吉池孝一

甲骨文字に関心を持つ学生と教員の対話です。登場人物の設定は次のとおりです。

佐藤久美^{さとうくみ}：学生。歴史一般に関心がある。

山村健一^{やまむらけんいち}：学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を趣味としている。

安井教授^{やすい}：漢文の教員。いろいろな文字に関心がある。学生とともに甲骨文字の勉強会をはじめた。

〈第3回目〉

安井教授：第2回の勉強会では、劉鶚^{りゅうかく}の『鉄雲蔵龜』(1903年)の序文を中心に議論をしました。この本は、甲骨文を拓本の形ではじめて世の中に紹介したものでしたね。その序文では、商(殷)の直系3代の王名を含む甲骨文をあげて資料の位置づけをするなど、解読の基本的な方向が示されました。そして、2つの“解読の手続き”を確認することができましたね。

山村健一：“解読の手続き”の1つ目は、西周以降の漢字の形と意味、および漢字の構成原理を利用して甲骨文字を解読する、というものでした。

佐藤久美：“解読の手続き”の2つ目は、{干支+ト+問+問う内容}という甲骨文(卜辞)の基本的な形式を見つけ出し、それを利用して解読に取り組んだ、ということでした。

安井教授：劉鶚の『鉄雲蔵龜』は、甲骨文を初めて紹介した書とし言及されるのですが、解読において、基本的な方向を示したという点においても、少なからぬ貢献をしているということを確認しましたね。その議論の最後で宿題が一つ残りました。その宿題については次回に検討しようということになりましたが、佐藤さん、問題となったところをまとめてもらえますか。

佐藤久美：はい。劉鶚が見つけた甲骨文(卜辞)の基本的な形式は{干支+ト+問+問う内容}というものでしたが、「ト」と「問」の間にさまざまな字が1字置かれる場合があります。劉鶚は、「問」の直前の字について、初問の「初」、再問の「再」など、さまざまな“問い方”であると解釈しました。その後、28年を経て、董作賓^{とうさくひん}は「大龜四版考釈」(1931年)という論文で、「問」(董氏は「貞」とする)の直前の字はさまざまな貞人(占いをつかさどり問いを發する人)の名であるとししました。この貞人の発見がどのように行われたか確認をしましょうということでした。

安井教授：そうですね。貞人名であるという説は、現在ではほぼ認められており、この貞人の発見により甲骨文字の学問は大きく進展しました。今回の勉強会では、「ト」と「問(貞)」の間にある字の解釈について、最初に劉鶚の序文を検討し、次に董作賓氏の論文を検討しましょう。なお、{干支+ト+問+問う内容}の「問」ですが、甲骨文字の𠄎に相当します。劉鶚は漢字楷書の「問」に置き換えました。その後の研究で「貞」とされ¹、董氏も「貞」とします。今回の勉強会では両方を混用しますが同じものと理解してください。

《劉鶚の說》

安井教授：劉鶚の說については『鉄雲蔵龜』の序文をみることになります。前回と同様に『古代殷帝国』(貝塚茂樹^{かいづか しげき}編、みすず書房、2001年)に掲載されている日本語訳によ

1 『契文举例』(孫詒讓^{そんいじょう}著、序文の年は1904年)による。

りましょう²。佐藤さん、前回と同様にまとめをお願いします。

佐藤久美：はい。劉鶚は序文のなかで、{干支+ト+問+問う内容}という基本的な形式を備えた甲骨文（卜辞）を5つあげ、それを漢字楷書に置き換えて提示しています。それは次にあげる5つの卜辞です。①から⑤までの番号は、いま便宜的に付けたものです。

- ① 「丁酉ト大問角丁亥彤日」（二十二葉第三片）
- ② 「庚戌ト哉問雨帝不我□」（三十五葉第三片）*□は欠落等を示す
- ③ 「庚申ト厭問歸好之子」（百廿七葉左行）
- ④ 「辛丑ト厭問兄於母庚」（百廿七葉右行）
- ⑤ 「癸子ト厭問虺父ト」（六十七葉第三片）

①は「ト」と「問」の間に「大」があります。②は「哉」が、③④⑤は「厭」があります。

山村健一：「ト」と「問」の間に「大」「哉」「厭」があるわけですが、これが問題になるところですね。劉鶚はどのような説明をしているのですか。

佐藤久美：「およそ問と称するものに四種あり。哉問・厭問・復問・中間なり。中の字は𠄎と作る。哉と厭の両問は最も多し。恐らく哉は初問、厭は再問の意味ならん。故に詩に「我が龜すでに厭し、我に猶を告げず」（詩経の小雅小旻篇）というのは、自分が再問するも龜は自分に告げてはくれぬということなり。」とあります³。

山村健一：「哉問」は“初めて問う”、「厭問」は“再び問う”ということで、“問い方”を表しているようですね。「復」と「中」の例文はないのですか。

佐藤久美：残念ながら「復」と「中」については、例文も説明もありません。また「大」ですが、例文は提示されているのですが四種の“問い方”には入れません。

山村健一：「四種」とするのは「五種」の誤記ではないですか。

安井教授：それはどうでしょう。私のような素人が『鉄雲蔵龜』をみても、「ト」と「問」の間の字は四種や五種どころではなく、さらに多くを確認できます。劉鶚は、問題となる字が多数あることは承知のうえで、そのうちの四種については“問い方”として解釈できるということで「哉問・厭問・復問・中間」としてあげたのではないのでしょうか。

山村健一：そうですか。ところで、③と④の意味は前回に確認しましたが、①②⑤はどのような意味になるのでしょうか。

安井教授：③の「庚申ト、厭問、歸好之子」は“庚申の日にトして再び問う、歸好の子か”でした。④の「辛丑ト、厭問、兄於母庚」は“辛丑の日にトして再び問う、母庚に与えるか”でした。

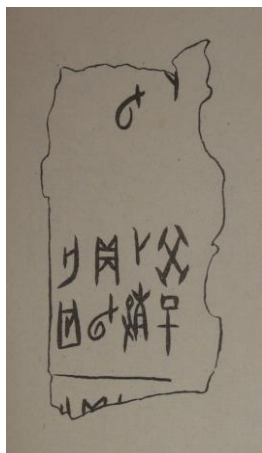
①の「丁酉ト、大問、角丁亥彤日」については、劉鶚は「角」を“獵”字に相当するとしているので、“丁酉の日にトして大いに問う、丁亥の彤日に獵をするか”くらいの意味になるのでしょうか。「彤日」の説明はありませんのでわかりませんが。②の「庚戌ト、哉問、雨帝不我□」は説明がなく欠けている部分（□）もあるので、劉鶚がどのように読んだかわかりません。⑤の「癸子ト、厭問、虺父ト」については説明がありますので、おおよその意味は理解することができます。佐藤さん、劉鶚の説明はどのようになっていますか。

佐藤久美：「り字は杞伯每父敦に見ゆ。む字はおそらく虺の形を象りしものにして、鼎彝の虺の字と似たり。虺父はトを掌るもの名たるべし。故に「虺父ト」というもの甚だ多し。」とあります。

² 初版は昭和33年（1958年）。2001年は新装版。

³ 凡稱問者有四種。曰哉問、曰厭問、曰復問、曰中門。中字作𠄎。哉、厭兩問最多。疑哉爲初問。厭爲再問。故詩曰。「我龜既厭。不我告猶」。言我已再問。而龜不我告也。

安井教授：「杞伯每父敦」は青銅器の名です。「鼎彝」は青銅器のことです。「癸子ト、厭問、虺父ト」の意味は“癸子の日にトして、再び問う、虺父がトすか”ということになりそうです。⑤の漢字楷書が基づいた拓本の模写はつぎのとおりです。



『鉄雲蔵亀』(台湾：芸文印書館、1959年、嚴一萍再版本)の模写
*拓本は文字が白く浮き出るが、模写は文字を黒く反転して書いてある

山村健一：この“虺父がトすか”ですが、どうも腑に落ちません。これは、複数の占い師がいて、そのうちの誰が占うか、という“占い方”を問うていることになりませんか。そうだとすると、このような内容が、占いとして成り立つのでしょうか。

安井教授：たしかに、具体的な内容を問うのではなく、占い方を問うというのは、占いとしてどのような意味となるのか納得のいかないところがあるかもしれません。じつはこのト辞、その後、まったく異なる解釈がなされ、「癸巳ト、蔽貞、旬亡禍」「癸巳の日にトして、蔽(貞人名)が貞う、旬(これからの10日間)に禍は亡いか」となります。

山村健一：“旬に禍は亡いか”ならば占いとして不都合はないようにみえます。それにしても“虺父がトすか”と“旬に禍は亡いか”とは全く異なります。これは董作賓が解説したのですか。

安井教授：いいえ。王国維という清朝末に活躍した学者の仕事です⁴。

佐藤久美：すみません。話を劉鶚にもどしたいとおもいます。

これまでの話によりますと、劉鶚は「ト」と「問」の間の字のなかに、問い方を表わすものとして4種類あるとした、ということですね。

安井教授：そのとおりです。もっとも、「ト」と「問」の間に置かれる字は4種にとどまりません。そのことは、おそらく劉鶚も認識していたでしょう。『鉄雲蔵亀』が出版された翌年に、孫詒讓という中国の学者が『鉄雲蔵亀』を資料として『契文举例』(序年は1904年)を書き上げました。そこでは、「某貞」の某に相当する字を14種としました。なお、14種にとどまらないであろうとも述べています。その後、葉玉森という学者は『鉄雲蔵亀』以降の甲骨資料も合わせて研究して『殷契鉤沈』(1923年)を著し、そこでは45種としました⁵。45種としたのは、次に検討する董作賓氏の「大亀四版考釈」(1931年)より前のことです。

山村健一：「某貞」が何十種類もあり、それがもしも問い方のようなものだとしたならば、多すぎるのではないか、という気がします。

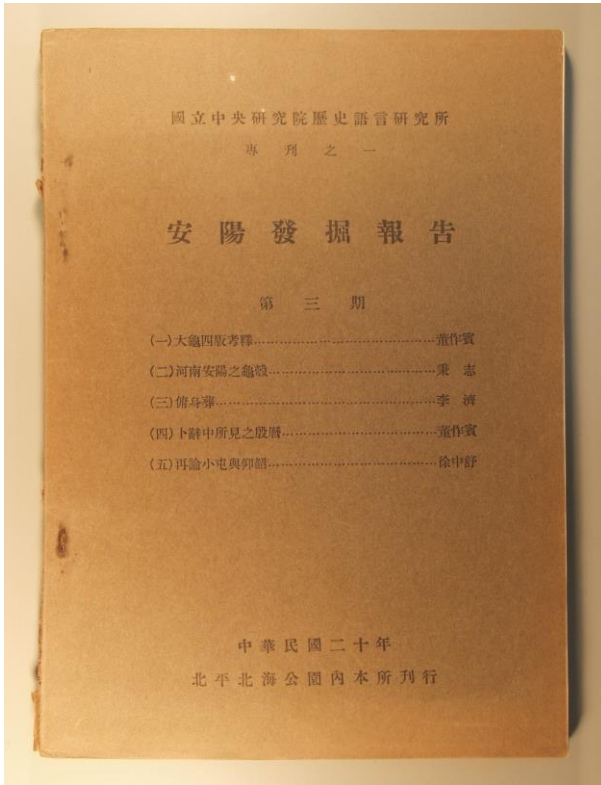
4 解説の経緯については「古文字“解説”の方法—甲骨文字はなぜ読めたか」『甲骨文の話』(松丸道雄著、大修館書店、2017年)を参照のこと。

5 「關於貞人」『甲骨学六十年』(董作賓著、芸文印書館、1965年)の63-70頁を参照。

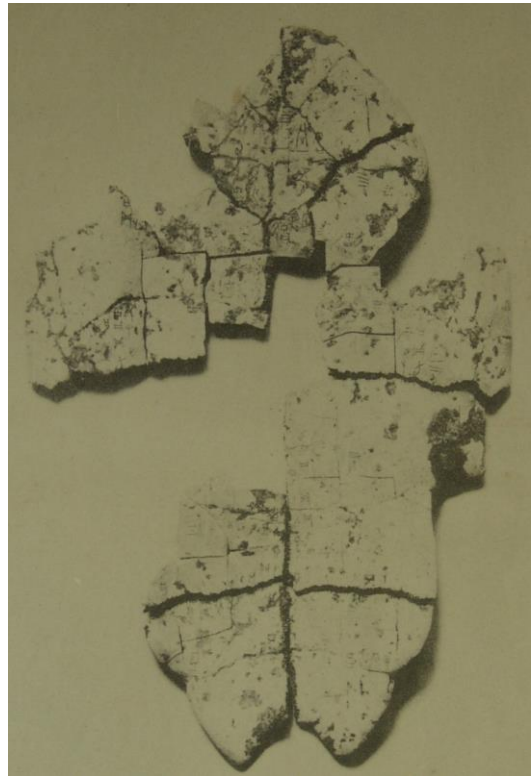
安井教授：おそらく董作賓氏もそのように考えたのでしょね。それでは次に、董氏の「大亀四版考釈」（1931年）を検討しましょう。

《董作賓の説》

安井教授：これが董氏の論文「大亀四版考釈」が掲載された研究雑誌の『安陽発掘報告』（1931年第3期）です。先日、古書店より購入しました。この論文は、同時に同じ場所から出土した4枚の亀版についての研究報告です。右側は今回問題とする第4番目の亀版の写真です。これは論文に掲載されたもので、写りはよくありません。



『安陽發掘報告』

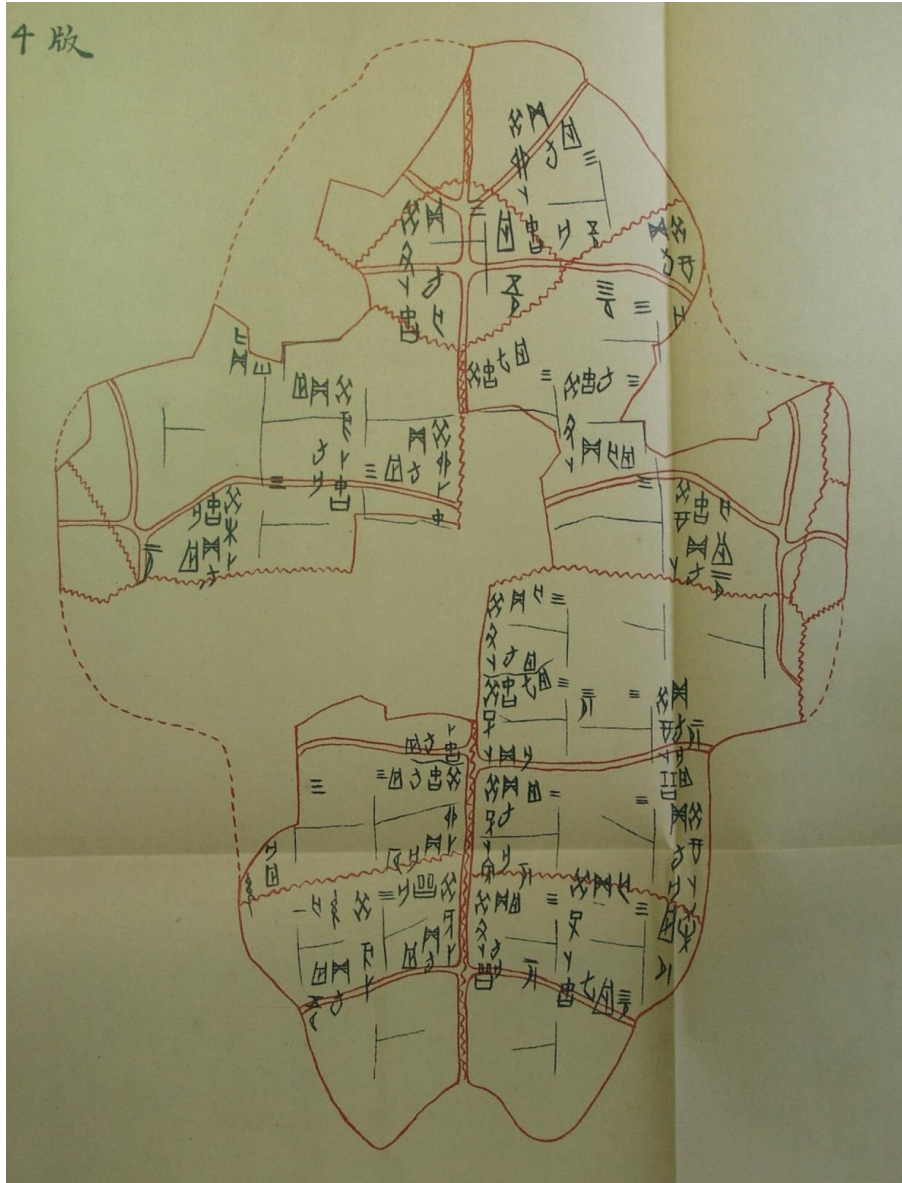


第4亀版の実物の写真

安井教授：それでは「大亀四版考釈」を読んでみましょう。貞人を着想した部分の記述を抜き出し、その日本語訳を作ってみました。なお、同論文に掲載された模写も紹介しません（下図参照）。

これまで、契文を研究する者は貞の上の1字について、或いは官職名ではなかろうか、或いは地名ではなかろうか、或いは貞の事類ではなかろうかとしたが、いま第4版により、それを人名と確定することができる。もしも貞の上の1字を地名とするならば、“在向貞” “在潢貞”（『殷虚書契考釋』下五葉による）のように、必ず在の字があるはずである。だだ“某某ト某貞”と言うからには、決して地名ではない。また、第4版は全て卜句の辞となっており、もしも貞の事類あるいは官職名であるならば、亀版の全体が一致するはずであるが、この卜句の亀版には、貞の上の1字に異なるものが6つある。これにより貞の事類や官職名ではないことがわかり、卜問命龜の人であることがわかる。ときにはこの人名は官職に非常に似ているが、それは古人にあっては官職を名としたものが多いためである。また、卜辞には“某某ト王貞”や“王ト貞”という例が多く、卜問命龜は、ときには王みずからが行い、ときには記録をつかさどる臣下に行わせたことがわかる。これにより、卜

問をした者の名を書いたものであることは疑いないのである。貞^{てい}卜し、命龜の人を書くのは一時の風習であり、一部の卜辭には貞人を書かないものがあり、また全く貞人を書かないものもある⁶。(438 頁)



「大龜四版考釈」に掲載された第4 龜版の模写

山村健一：まずこの訳文について、基本的なことを確認させてください。貞の直前の1字について、「官職名」、「地名」、「貞の事類」のいずれかと考えられている、ということ

⁶ 従前研究契文者對於貞上之一字，有疑爲官名者，有疑爲地名者，有疑爲所貞之事類者，現在根據第4版，可以確定他是人名。因爲貞上一字如爲地名，則必有在字，如“在尙貞，”“在潰貞”（殷虛書契考釋下五葉引），只言“某某卜某貞”者，決非地名。又4版全爲卜句之辭，若爲卜貞事類，或職官之名，應全版一致，今卜句之版，貞上一字不同者六，則非事與官可知。又可知其決爲卜問命龜之人，有時此人名甚似官名，則因古人多有以官爲名者。又卜辭多“某某卜王貞”及“王卜貞”之例，可知貞卜命龜之辭，有時王親爲之，有時使史臣爲之，其爲書貞卜的人名，則無足疑。貞卜而書命龜之人，此一時風尚，也有一部分卜辭不記貞人的，也有全不記貞人的。(438 頁)

ですが、「貞の事類」というのは、劉鸚が述べた“問い方”の種類のようなものでしょうか。

安井教授：この部分のみでは判断はできませんが、この論文の「事類考二」（435頁）で、貞卜の事類（“貞卜的事類”）として、祭祀、狩、稔、風雨、夢、卜旬など14種をあげています。ですから、ここでいう「貞の事類」は、14種の占う内容に応じた“貞”の表現を意図しているのでしょう。劉鸚が述べた「初めて問う」「再び問う」のような“問い方”の種類は含まないかもしれません。

山村健一：「第4版の卜辞は全て卜旬の辞となっております」とあります。「卜旬の辞」とはなんのでしょうか。また「全て卜旬の辞」とはどういう状況でしょうか。

安井教授：「旬亡禍」^{しゆん}“旬（これからの10日間）に禍は亡いか”^{わざわい}という内容の甲骨文（卜辞）です。欠けているところが比較的少ない亀の甲羅が4枚出土したわけですが、そのうちの第4番目の亀版には、{干支+卜+（意味不詳の1字）+貞+旬亡禍}という卜辞が全面にわたって刻まれていました。他の内容の卜辞は刻まれていない、ということです。

山村健一：「卜問命亀の人」や「命亀の人」とはなんのでしょうか。

安井教授：卜問（占う内容）を亀に告げる人という意味で、董氏は貞人^{ていじん}と名づけました。この文章の末尾の「記録をつかさどる臣下」にも相当するようです。

佐藤久美：「一部の卜辞には貞人を書かないものがあり、また全く貞人を書かないものもある」とはどういうことでしょうか。

安井教授：それを説明する前に、卜辞の形式について確認をしなければなりません。同じ日に占った卜辞のうち、関連する内容のものは、{干支+卜+（貞人）+貞+問う内容1}+{貞+問う内容2}のように連続したものとして刻まれており、2番目の「貞」の直前には何も付きません。

佐藤久美：2番目の問いについては{干支+卜+（貞人名）}が省略され、貞人名が書かれることはないということですね。

安井教授：はい、そういうことです。ですから{貞+問う内容2}のほうは、今は問題にしないということです。それで、4枚の亀版のうち、第1の亀版には{干支+卜+貞}の形式を持つ卜辞は13例あり、その内の1例は貞人名が書かれていません。第4の亀版には同様の形式を持つ卜辞は20例あり、その内の1例は貞人名が書かれていないようにみえます⁷。これらは「一部の卜辞には貞人を書かないものがあり」に相当します。また第3の亀版には同様の形式を持つ卜辞は10例あり、その全てに貞人名は書かれていません。これは「全く貞人を書かないものもある」に相当します。第2の亀版には同様の形式を持つ卜辞は5例あり全て貞人名が書かれていません。

《貞人名説への疑問》

佐藤久美：語の意味はおおよそわかりました。書かれている内容に、いくつか納得できないところがあります。まず「地名」ではないとする部分です。「地名」であるからには、{在+地名}のように在（～にある）が地名に前置するということですが、在が省略されることもあるのではないのでしょうか。

安井教授：省略される可能性はない、とはいいいきれません。しかしここでは、董作賓^{とうさくひん}氏の考え方にしたがって前に進みましょう。董氏は、貞の前に{在+地名}のある卜辞を確認し、在が付かないものは地名ではないと考えた、ということです。その理屈は理解できるのではないのでしょうか。

佐藤久美：はい、理屈はわかります。それでは「官職名」ではないとする部分と「貞の事類」ではないとする部分についてお聞きします。董作賓は、「官職名」や「貞の事類」でないことは、「第4版の卜辞は全て卜旬の辞となっている」ことからわかるとします。この理屈がよくわかりません。すべて同一の内容ならば、どうして「官職

⁷ ちょうど欠落している部分にかかるので、確かなことはいえない。

名」や「貞の事類」は成り立たないのでしょうか。

安井教授：すべて同一の内容であるにもかかわらず、{干支+ト+（意味不詳の1字）+貞+旬亡禍}のうち、「意味不詳の1字」の部分に6種の異なる文字が使われているところが大事なのでしょう。同じ内容を問うのであれば同じ1種の官職名でいいではないか、なぜ6種もの官職名が必要になるのか。また、同じ内容を問うのであれば同じ1種の問い方でいいではないか、なぜ6種もの問い方が必要になるのか、ということなのでしょう。

山村健一：ところで、第4版が使用された期間はわかるのでしょうか。

安井教授：董氏の調査によると、第4版が用いられた時期は、10月から翌年の5月までの9ヶ月間にわたるものです（431-432頁参照）。

佐藤久美：9ヶ月の間に、同じト旬の辞に対して、異なる6つの「官職」、すなわち異なる6つの部署が関わるというのは、有り得ないことではないにしても、たしかに自然ではありませんね。また、「貞の事類」について、祭祀、狩、稔、風雨、夢、ト旬などの占う内容に応じた“貞”の表現を意図しているのならば、ト旬用の一つの問い方でいいのではないかと考えるのも理解できます。しかし、劉鸚が述べたような「初めて問う」「再び問う」などのような“問い方”の種類であったならば、同じト旬の辞であっても、いろいろな問い方はできるはずですよ。

安井教授：「大亀四版考釈」（1931年）よりも前に公表された『殷契鈎沈』（葉玉森著、1923年）で「ト」と「貞」の間の1字として45種をあげているので、おそらく、官職や貞の事類や問い方としたならば数が多すぎるという常識的な判断が根底にあるでしょう。

佐藤久美：官職や貞の事類や問い方が排除されたとして、どうして貞人名ということになるのでしょうか。

安井教授：根拠らしいものは2つあります。1つ目は、問題の字に官職に似ているものがあり、それは、古人には人名を官職によってつける習慣があったためであろうということです。もっとも、どの字が官職に似ているものに相当するのか書いてありません。2つ目は、“某某の日にトして、王が貞う”や“王がトして貞う”というように、王が貞う例がある。そのような例があるからには、記録をつかさどる臣下（貞人）が貞う、としても不自然ではないということです。

佐藤久美：その“某某の日にトして、王が貞う”について、敢えて言うならば、初めて貞（問）う、再び貞（問）う、王自ら貞（問）う、というように、劉鸚が考えたような“問い方”の一つとして解釈することもできるのではないのでしょうか。また、地名、官職名、貞の事類、問い方などが混在した結果、多数になっていると考えてもいいのではないのでしょうか。

いずれにしても、貞の直前の字を董作賓は貞人名と決定するわけですが、その決定に至る経緯が明瞭に示されておらず“飛躍”があるような気がしてなりません。

《解説における飛躍》

山村健一：“飛躍”があるようにみえるということですが、それは非難されるようなことではないと思います。最近、解説史の本を読んでいるのですが、古代ペルシアの楔形文字の解説はおもしろかったです⁸。それによると、2つの着想が解説の契機になっていました。1つ目は、楔形文字の碑文のなかに同じ7文字が繰り返しあらわれるのですが、それを中期ペルシア語にあらわれる称号“諸王の王”の王をあらわすと推定したこと。2つ目は、称号“諸王の王”の直前には王名がくると推定したこと。この2つの着想は、理詰めによって得られたものではありません。

そこで、思いつきなのですが、貞人名の着想を支えるものとして、劉鸚の序文を

⁸ 『失われた文字の解説 I』（E. ドーブルホーファー著、矢島文夫・佐藤牧夫訳、山本書店、1963年初版。1980年による）参照。

あげることはできないでしょうか。

安井教授：どういうことでしょうか。

山村健一：さきほど見た第4番目の亀版ですが、全体にわたって“旬（これからの10日間）に禍は亡いか”という卜句の辞で埋め尽くされていたわけですね。そして、この「旬亡禍」という卜句の辞は、劉鸚の序文では「魍父ト」「魍父がトすか」と読まれました。魍父といえは、序文の説明に「魍父はトを掌るものの名たるべし。」とあるように、ト人の名前です。この事実を、見方を変えていうならば、第4番目の亀版は、ト人の名前で埋め尽くされていたということになります。

佐藤久美：山村さんの言いたいことは、こういうことですね。董作賓は第4番目の亀版の全面にある{干支+ト+（意味不詳の1字）+貞+旬亡禍}をながめながら、意味不詳の6種の字が、何を表わすか考えた。そして、かつて劉鸚によって「旬亡禍」が「魍父ト」と読まれたこと、「魍父」がト人名であること、に思いが至った。その時、意味不詳の6種の字とト人名とがつながり、貞の直前の字は占いに關わる人名ではないかと閃いた。そこで、貞う人であるから“貞人”とし、6種の文字は異なる貞人の名であるとした。

安井教授：たしかに、甲骨文字の解読にたずさわる研究者であるならば、卜句の辞について、かつて劉鸚がト人名を含むト辞として誤読した、と承知しているでしょう。しかし、貞人名の着想において、劉鸚のト人名が、どれほど關与したか、あるいは關与しなかったか、当事者が述べない限りわからないことです。

佐藤久美：いろいろなことが総合して、連絡し合って、貞人名の着想に至ったのだとおもうのですが、着想の契機の一つとして、山村君の“思いつき”はおもしろいとおもいます。

安井教授：そうですね。いわゆる未解読文字の解読の初期においては、大胆な仮説を立てながら少々の無理をしても解読を前に推し進めざるをえないようにおもいます。その作業のなかで、これまでの研究の積み重ね、或いは思い込みを断ち切るような飛躍が必要となる時もあるでしょう。それは、帰納からではなく、演繹から資料をながめる瞬間ともいえます。董作賓氏の「大亀四版考釈」（1931年）における貞人の発見にも、理屈のみでは解決し得ない“飛躍”の一瞬があったのかもしれませんが、それがどのようなものであったか、いまとなっては分かりませんが、あなたたちは、飛躍を支えたものの一つとして、劉鸚の序文の記述、すなわちト人名の記述をあげたい、ということですね。

山村健一：ご本が生きておられたら、それは迷惑な話だ、と言うかもしれません。ところで、貞人の発見ですが、甲骨文字研究にどのような影響をあたえたのでしょうか。

安井教授：貞人はグループを作っており王の交代とともに入れ代わるようです。そのグループと歴代の殷王を結びつけることにより、それまでバラバラに存在していた甲骨文字資料を時代別に位置づけ、歴史の史料とすることができるようになったようです。貞人の発見は期を画する出来事であったということでしょう。

今回の勉強会はここまでにします。次回は、甲骨文を読む準備をしましょう。